

---

# 銀魂 ~ 金色の兎がもたらす嵐 ~

天野裕月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀魂 ～金色の兔がもたらす嵐～

### 【Nコード】

N2021T

### 【作者名】

天野裕月

### 【あらすじ】

満月が照らす夜の歌舞伎町その町をかける少女がいた。その少女の正体とはいかに!?

## 第一話 金色の兎は夜をかける（前書き）

どうも！初めて投稿します文学少女です！見てくれたらうれしいです  
あ、間違えた。読んでくれたらうれしいです

## 第一話 金色の兎は夜をかける

満月が照らす夜の歌舞伎町

その町をかける少女がいた。

金色の髪が月に照らされ輝いていた。

その少女を追いかける六つの影があった。

「待て！．．．くそつすばしっこい奴め．．．。」

男が叫んだ。

その時少女がこけた。

走り出そうとしても遅く、男達に囲まれていた。

一人の男が少女を羽交い絞めにする。

「．．．っ！はなしてっ！」

少女は必死に抵抗するが大柄な男にはきかない。

「やっと捕まえたぞ。手間かけさせやがって．．．連れて行け。」

リーダーらしき男が言った。

「離しなさいよっ！」

そう言つて少女は捕まえられてた男の腕に噛み付いた。

「いてっ！この野郎！」

男が少女を投げた。

ドサッ

少女がこけて尻餅をつく。

男が持つていた刀を少女の首にあてる。白い肌に赤い血が流れる。

「．．．．．。」

少女が男を睨みつける。

「俺はお前を連れて帰れと言われたただだ。確か無傷では言つて

なかったんだっけな．．．。」

男は言つてからニヤツと笑った。

「そんなの関係ない。」

「はあ？」

「私は目的を果たすまで帰らない。」

少女は男の目を真つ直ぐ見て言った。

「今この状況でよくそんなことが言えるな。死ぬかもしれないんだぜ？」

男が鼻で笑った。

「死なないよ。私は死なない。なんなら試してみれば？」

少女がニヤツと笑った。

勝ち誇ったような笑みだ。

「ほっいい度胸じゃねえか。試してやるよ。」

男は刀を少女の首から離し振りかざした。

その時

カキーン!!

男の持つていた刀がクルクルと回りながら地面にささった。かわりに少女の前には笠をかぶった長髪の男が立っていた。

「誰だ貴様は．．．!？」

男達が身構える。

「貴様らに名乗る名などない。弱き者を守る侍が弱き者を斬るなどもつての他だ。」

おとなしく刀をおさめぬというのなら．．．．．

長髪の男が構える。

「斬るぞ。」

「フツ．．．たった一人でか?．．．．やれ」

男が言うとともに男達が襲い掛かってくる。

長髪の男はそれをもともせず敵を倒していく。

4人目を倒したとき後ろから攻められる。

笠は斬られたが、長髪の男はかがんでよけ、5人目を倒す。

長髪の男が振り返る。

男が後ずさる。

「．．．．．っ!? 貴様は!．．．．桂．．．小太郎．．．。」

呟く。

「指名手配犯がなぜこんなところに．．．」

「刀をおさめて去るか、斬られるか、決めるのはお前だ。」  
桂が言った。

「アハハハハ！！」

男が急に笑い出した。

「何がおかしい．．．?」

「指名手配犯が目の前にいるのに逃げろってか？新選組のところに連れてきやあ、大金が手に入るってのにか？するわけねえだろんなこと．．．俺が勝つさ。」

男が言つて構える。

「そうか．．．それなら．．．」

桂も構えた。

「ダッ！！という音とともに2人がかける。

すれちがいとまった。

はたから見ればそうだろう。でも、

男が倒れた。

「安心しろ。峰打ちだ。」

桂はそう言つて刀を鞘にしまった。

「お主、大丈夫．．．。」

振りかえりながら言った。

だが、そこには少女の姿はなかった。

## 第二話 無法地帯に住む愉快的な万事屋（前書き）

お待たせしました！！第二話です！！やっとです！！更新できました！！今回は長めです！！それではどうぞっ！！

## 第二話 無法地帯に住む愉快的万事屋

「起きてくださーい！朝ですよ！」

『万事屋銀ちゃん』と書かれた看板がある家から聞こえてくる。

……うるさい。安眠妨害だわ。

私はそう思いまた眠りについた。

すると10分もたたないうちにまた怒声が聞こえてきた。

「起きろって言うてんだろっが！！」

そしてドカドカという物音。

……うるさい……。人が気持ちよく寝てるのになんで邪魔するのよ……。

そう思って目を閉じるが眠れない。

……人の眠気まで取りやがって……。

私は仕方なく場所を移動しようとした。すると横に積んであった漫画が崩れ落ちた。

ドサドサドサッ

あ、やっちゃった……。



『ジャンプ』と書かれた本を手にする。てかこれ全部ジャンプだ・

ペラペラペラ……これが漫画……。

カンカンカン……

足音が近づいて来る。どうやら家の住民が降りてきたみたいだ。

ヤバ……

私は急いで物陰に隠れた。

「何アルカ？」

女の子の声だ。

「積んであったごみが倒れたんですよ。」

今度は少年の声。

「猫がやったんだろほっとけよ。」

眠そうな男の声。

「ニ、ニヤア……」

苦し紛れに猫の声の真似をする。

「ほら、猫じゃねえか。帰るぞ。」

「そうアルナ。」

「ですね。」

足音が遠ざかる。

フウ・・・とため息をつき、立ち上がり、顔を上げる。

すると目の前にさっきの2人が立ちふさがっていた。

そして手にはなぜか虫取り網。

「な、何？」と私が言う前に

「つてなると思つたかああ！！」

と襲い掛かってきた。

「えええ〜！！」

反対側から出ようと振り返るが、そこに残りの1人がいた。

そしてやはり虫取り網。

「通行止めアル！観念するネ！」

襲い掛かってくる。

私は銀髪の天然パーマの男とメガネをかけた地味な少年、チャイナ服の少女にはさみうちになれ、狭い路地裏で叫んでいた。

「ぎゃああああ！！」

目の前には机がある。その机にお茶の入ったコップが一つ。  
その前にはソファがあり、男が座っていた。  
その右に少女、左に少年が座っている。

私は……………縄で体をぐるぐる巻きにされて動けない。  
何この状況……………？

お茶出されても動けないから意味ない。

「正直に話すアルヨ。」

少女が言った。

「身のためですよ。」

少年がメガネを直しながら言う。

「お前が連続放火事件の犯人だろ？」

男が言った。

「だから違うつって言ってんでしょぅが！！」

私は間を空けずに反論した。

「犯人は最初みんなそう言うんだぜ？」

男が机をトントン叩く。

「犯人じゃなくても言います。」

「証拠はあがつてるアル！！」

少女が机をドンツと叩いて言った

。「証拠って何よ？」

「そ、それは・・・定春が言ってるから間違いないアル！」

少女が犬（てかでかすぎ！！）の背中をバシツと叩く。

「アン？」

定春が首をかしげる。

「首かしげてるけど、定春。」

「そんなことないネ！ねっ定春っ！」

少女が定春の頭をなでた。

「ZZZ...」

「ていうか、気持ちよく寝てんじゃないの。定春。」

「う、うるさいアル！テメーに気安く定春とか呼ばれたくないネ！このパクリ女が！」

少女が片足を机にドンツと乗せながら言った

。「誰がいつ何をパクツたって!？」

私も負けじと言い返す。

「テメエが今チャイナ服をパクツたって言ってるアル!!」

私と少女の間に火花が散った。

「まあまあ落ちついて二人とも。神楽ちゃん、机壊れるから。」

少年が言った。

顔が地味だと言葉まで地味になるんだな。

「なんか今失礼なこと言わなかった？」

「言っていないよ。ただ、思っただけ。」

「失礼なことは否定しないんですね。」

話を元に戻します。あなたは何故あそこにいたんですか？」

「寝てた。昼寝よ。」

「いいや嘘だな。年頃の娘があんなところで昼寝なんかするわけねえだろ。」

「たくつ、そんなの俺でも分かるよ？もっとマシな嘘つけてお母さんに言われなかったか？」

「いや、言われてないから。」  
即答。

「そうアル。マミー泣いてるアルヨ。どうしてもっとマシな嘘つけないのかって。ホラ。」

少女がドアのほうを指して言った。

そこには、髪を一つにまとめた女の人がいた。

「いや、泣くポイント間違ってるから。てか誰？」

「うう……はやく自首して頂戴……千春う……」

「だから誰！？千春って誰！？全然関係ないお母さん連れて来てんじゃん！！」

「何言ってるんだ。ほおくらテメーにそっくりじゃねえか。」

男が一枚の写真を見せる。

そこには、確かに金髪の少女が写っている。  
が……

「全然似てないじゃん！！てか、これ完璧偽造じゃん！！上から金色で塗ってるだけだろ！！」

「チツばれたか……(ボソツ)」

「ばれるわ！！こんな分かりやすい偽造ないから！！」

「どうするアルか？銀ちゃん。あいつ全然落ちないヨ。」

「くそつやべーな。これで騙されて落ちると思ったんだがな。」

「勝手に千春塗っちゃいましたよ。絶対怒られますって。」

「あーそこはもともとこんな色だったって言っときゃいいんだよ。」

「あんたら人をなめるのもいい加減にしろよ。」

急に、男の表情が真剣になった。

「なっ、何よ・・・急に・・・」

私は気持ちだけ構えた。なんたつて動けないもんね。

「・・・あれをやるぞ。」

男が少し間をあけて言った。

「まさか・・・あれを・・・？」

少年が驚愕したように言った。

「正気アルか！？銀ちゃん！？」

少女が叫ぶ。

「いやあれって何？」

私は冷静に言う。

三人はそんな私を見てニヤツと笑った。  
ものすごくくいやな予感がする。

三人が近づいて来る。

「な、何する気よ？」

口では強がってるが、内心メツチャ恐い。

「あれっていやあ、あれだよな？」

「もうこいつも終わりアルな」

「あ、あああれが何だか知らないけど、や、やややれるものならやってみなさいよ。」

ものすごくかみかみである。

「ほお、いい度胸じゃねえか。神楽。」

「世にもないもの見せてやるネ。」

少女が私の後ろに立つ。

心構えをした時、縄がゆるんだ。

え？と思って振り向く。

その時、後ろからこしょばされた。

「プツ・・・アハハハ・・・」

堪えようとしても堪えきれない。

「さあはくアル！お前がやったアルか！？」

「アハハ・・・だからやってないってば・・・キャハハハ・・・つつつて———！」

なると思っただかああああ！！！！

私は、右手で少女と男の手を掴み、左手で少年と男の手を掴んだ。

「・・・入？」

「どじゃあああー！！！！」



そのまま勢いよく振り回した

「ゴフッ！」

最初に男が投げ飛ばされ襖にぶつかった。

「のわぁっ!!！」

次に少年が吹っ飛ばされ男の上に転がる。

「うわぁっ!!！」

最後に少女がその上に投げ飛ばされた。

バタンッ

重さに耐え切れなかった襖が音を立てて倒れる。

「だから私じゃないって言ってんでしょっがっ!!！」

私はそう叫んだ後、逃げようと走り出した瞬間、足を掴まれた。

「はぎゃっ!!！」

第二話 無法地帯に住む愉快な万事屋（後書き）

男 銀さん

少女 神楽

少年 新八

ですっ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2021t/>

---

銀魂 ~ 金色の兎がもたらす嵐 ~

2011年10月9日02時42分発行